

研究ノート

## 中国・三国時代史：“3世紀の危機”の視点から

### —同世紀世界史教育の再構成—

創価大学文学部・創価高等学校地歴公民科非常勤講師

満田 剛

#### 要 約

最新の『高等学校学習指導要領』及び『高等学校学習指導要領解説』地理歴史編において「時間軸からみる諸地域世界」や「空間軸からみる諸地域世界」という項目が新たに加えられ、同時代の諸地域世界の動向を比較・整理し、理解と認識を深めることが求められている。本稿では、まずは世界史教材の中でも生徒が興味を持つことの多い中国の後漢末から三国時代を取り上げ、気候・社会状況がコンピューターゲームや『三国志演義』などの小説、マンガによって生徒が抱くイメージとは必ずしも同じではないことを理解させる、この時代の東アジア世界が動乱の時代となっていく過程について気候変動などの様々な資料を用いながら多角的に考察した上で、同時代の（日本列島も含む）ユーラシア大陸諸地域世界の状況を概説し比較しながら、歴史的な流れの共通点（や相違点）を学ぶ方法・教材を提起したい。

#### I はじめに

高等学校世界史の学習において取り上げられる時間は長く、空間的範囲も広い上に、政治・経済・文化などの多様な事項を含んでおり、歴史に対する興味を抱かせることが難しいという課題は以前から存在している。

そのような中で、最新の『高等学校学習指導要領』及び『高等学校学習指導要領解説』地理歴史編の世界史Bの前近代においては、「隣接し合う地域世界間の関係性をより一層重視し」、「時間軸からみる諸地域世界」や「空間軸からみる諸地域世界」という項目が新たに加えられ、これまでの状況でも困難に直面している現場の教師にとっては更なる課題が浮上してきたことになる。さらに、「地域世界間の比較を行わせる場合には、……「自然環境と人間の歴史のかかわり」という主題を設定し、農民

---

キーワード：世界史、『三国志』、寒冷化、ユーラシア大陸諸地域世界、3世紀の危機

の反乱や人の移動に関連する事項を選び出し、それらと気候の変化を記した資料を関係付けながら、諸地域世界の動向に関する対比年表を作成させるなどの活動が考えられる』<sup>2</sup>とも述べ、同時代の諸地域世界の動向を比較・整理し、理解と認識を深めることが求められている。

以上を踏まえ、本稿では、まず世界史教材の中でも生徒が興味を持つことの多い中国の後漢末から三国時代を取り上げ、同時代の（日本列島も含む）ユーラシア大陸諸地域世界を比較しながら、歴史的な流れの共通点（や相違点）を学ぶ方法・教材を提起するものである。

## Ⅱ 中国・三国時代をきっかけとした3世紀世界史教育内容構成

### 1 学習上の位置づけ

世界史Bにおける東アジア世界の学習の中で、魏晋南北朝時代に関する学習の導入部分として、生徒にとって比較的関心が高い『三国志』を取り上げ、生徒の興味が高まり難い歴史、なかんずく中国史に対する興味・関心を呼び起こし、その上で同時代のユーラシア大陸諸地域世界の動向も比較しながら学ぶことで、地域を超えた大きな歴史の流れを理解させることを目指していく。

### 2 指導計画

#### (1) 導入

すべての生徒が、中国・三国時代に関する知識を有しているわけではないので、まず生徒に対して「『三国志』と名がつくもので、どのようなものに触れたことがあるか」ということを確認し、『三国志』に関する知識（人物名や国名など）を確認する。

2000年頃までで、生徒が『三国志』に触れるきっかけとなったものとして主に挙げられていたのは、小説では『三国志演義』の日本語訳や吉川英治『三国志』、マンガでは横山光輝『三国志』、コンピューターゲームではコーエー（現コーエーテクモゲームス）のシミュレーションゲームの『三国志』シリーズであったため、『三国志』について詳しい生徒の知識背景はある程度一定していた。

しかし、最近では歴史書『三国志』を題材とした小説<sup>3</sup>・マンガ<sup>4</sup>・ゲーム<sup>5</sup>などが急増し、『三国志』に触れたことのある生徒一人ひとりの知識背景が異なる場合が多くなっているため、このような確認が必要となる。

#### (2) 後漢末から中国・三国時代の状況

その上で、中国・三国時代が「西暦184年（黄巾の乱）～280年（呉の滅亡）の約100年間、現在「中国」と呼ばれている中の、主に漢族が住んでいる地域が魏・蜀漢・呉の三つの国に分かれて争っていた時代」であることを教科書や資料集・図説の地図を用いつつ簡単に説明する。その後、【付録・配布資料1】のフローチャート“後漢末

期から中国・三国時代、あるいは「華麗なる暗黒時代」を見ながら、2世紀半ばかり進んだ寒冷化の影響<sup>6</sup>もあって、後漢末期から「華麗なる暗黒時代」と称すべき混乱の時代に突入したことを以下のように述べる。

西暦100年代からの気候の寒冷化の影響により、温暖の時期に比べて農業がうまくいけなくなり、生産力の低下が起こる。これは国家の側から見れば税収が減ることを意味する上、農業生産に基盤を置く当時の経済においても不景気が起こってきたことが想像される。その結果、国家の税収が上がるわけもなく、軍などの維持も難しくなり、広大な中国を統一する国家を形成し続けることも困難となって、比較的小規模な勢力に細分化し、国家の体制そのものの維持も困難になった。

また、この時期から遊牧民の動きが活発になる。寒冷化による気温の低下は、高緯度になるほど厳しいとされ、寒冷な夏は北方に住んでいた遊牧民に対して南方への移住をせまり、彼らは農耕民の世界に侵入してきた。これが民族大移動の時代の始まりである。平和的に移住してくる場合でも混乱は起こり得るが、遊牧民が攻め込んでくれば混乱はさらにひどくなる。

このような状況の中で、宮廷内での外戚・宦官・官僚による三つ巴の権力闘争が続き、さらに黄巾の乱をはじめ、各地で反乱がひんばんに起こり、後漢は事実上滅亡した。こうした混乱そのものが、更なる農業生産の衰退を招き飢餓を引き起こした。国の支配する土地でも災害・飢饉・戦乱が多くなり（特に政治・経済の中心地であった中原の荒廃がひどい）、それらによって経営基盤を失った農民は農地から逃げ出した（有力者である豪族の保護下に入るか、流浪するしかなかった）。しかも、当時の農業は中央集権国家による灌漑事業・治水工事などが必要であったにもかかわらず、その国家の機能が喪失した（国家の弱体化、戦乱、地方的小国家の分立）こともあって、残された田土は荒廃していた。以上のようなことから、「土地は余っているが、耕す人がいない」という「農村の荒廃」が深刻化する。曹操配下の仲長統や司馬朗は、無主の荒地や未墾地が各所に散在していると述べている<sup>8</sup>。

実際、後漢末期の群雄たちは兵糧に苦しみ、乾燥した桑の実やどぶ貝を食べていたという話もあり、ある地域では農民が「人肉を互いに食べあった」<sup>9</sup>と記録されている。このような中で、治安の悪化による交通路の危険性もあって、豪族たちは食糧確保のために、より農業を重視し、自給自足の傾向を強く持つ荘園を形作っていくことになり、その結果貨幣経済は衰退し<sup>10</sup>、曹操により導入される（世界史の教科書にも必ず登場する）屯田制<sup>11</sup>などの対策が取られた。

その後、各地の群雄<sup>12</sup>が地方政権として割拠する。先に述べた混乱を收拾しなければ強くなれないこともあり、彼らはほとんど軍事優先の体制を敷いた。群雄割拠の争いは最終的に三国にまとまるが、魏・呉・蜀漢の全てが軍事政権的な性格を色濃く持つ国家であった。三つ巴の政治情勢の中で、それぞれの国が常にファイティング・

ポーズ（戦闘態勢）を取り続けなければならなかったからである。

このような悲惨な時代だからこそ、新たな宗教が登場してきたのであろう。三国時代は道教・仏教が広がりはじめ、儒教も一字一句おろそかにせず、精密な字句解釈を行う訓詁学や、現実主義的で実践的な荊州学<sup>13</sup>などが更なる発展を遂げる。そんな中で、道教の源流とされる太平道と五斗米道の、この時代における影響力は大きいものがあり、世界史の教科書でもそのことを記している。魏の軍事力の基盤となった「青州兵」は、黄巾の乱の残党を兵士として吸収したものであり、五斗米道の教団が支配していた漢中を魏が征伐したということは、教団の取り込みを意味していた。当時の庶民の心の内面の問題—宗教というものに真正面から取り組んだのが魏であり、太平道と五斗米道という当時の「新興宗教」を利用した国家と言い換えることもできる。また、漢中が蜀漢の領内にあったことからすると、蜀漢でも五斗米道の信者が多かったと推測できる。さらに、中国社会で仏教が目立って浸透しはじめたのも三国時代からで、魏や呉では仏寺が建立され始めていた。以上のようなことから、三国の各国は宗教をどのようにとらえるかという問題に直面していたこと、そしてこれらの宗教が隋・唐時代につながる思想的基盤となったことも指摘したい。

ここまでの流れを授業の中で述べたところで、『三国志演義』などの小説やゲームで生徒たちが知る個性豊かな英雄たちが華麗に活躍する時代を庶民の側から見れば「常に戦争に巻き込まれる悲惨な状態にさらされている」ことを指摘し、この時代を「華麗なる暗黒時代」と言って言い過ぎでないことを併せて述べる。

### (3) 同時代（2世紀半ばから3世紀）の日本列島の状況

さて、次に当時の中国世界と同時期の日本列島の歴史の流れを日本史Bの教科書・資料集を参照して確認してみよう。

まず、後漢末期と同時期の日本について、日本史Bの教科書・資料集にも必ず登場する史料『後漢書』東夷伝の倭の条、

桓・靈間、倭国大乱、更相攻伐、歴年無主。

という話がある。これは「桓・靈間」、つまり後漢の桓帝と靈帝の時期（147～189年）にわたる2世紀後半、ちょうど後漢が寒冷期に突入する頃に倭国も混乱したことを示している。つまり後漢の寒冷化と同時期に日本も寒冷化して、それが弥生時代末期の混乱にも関係があるとされる<sup>15</sup>。その混乱を収める形で登場したのが邪馬台国の卑弥呼であり、魏と外交関係を樹立していたことを述べる。

### (4) 同時代（2世紀半ばから3世紀）の地中海世界

さらに当時の中国世界と同時期のユーラシア大陸諸地域世界の歴史の流れを確認してみよう。

まず、世界史Bの各教科書の目次どおりであれば、すでに学習済みであろう地中海世界・ペルシア・インド方面についても述べ、特にローマ帝国については、先に述べた【付録・配布資料】のフローチャートが、ある程度そのまま使用できることを指

摘する。

これ以降は、高校世界史Bの教科書の記述を参照しつつ、この頃のローマ帝国の状況を整理していく。(おそらくは西暦100年代からの寒冷化の影響もあって)五賢帝の時代(西暦96~180年)の終わり頃から、ローマ帝国に侵入しようとする北方などの異民族との戦いが激化し、バルティア(3世紀以降はササン朝ペルシア)とも戦うなどの軍事的問題も発生し、五賢帝時代が終わると、帝位争いをめぐる内乱も発生する。

五賢帝時代末期に(これにも寒冷化による農業生産の減少からの税収不足の影響もあるが)経済・財政不振が表面化し、一部の上層市民が地方で行っていた大所領経営がパクス=ロマーナによる奴隷不足と、奴隷生産制の非能率性によって変化を余儀なくされる。さらに軍事力の増強・維持のため都市への重税、そして経済的疲弊・衰退が一層激しくなって、かえって税収も減少し、カラカラ帝は納税者(=ローマ市民)を増やし、税収を上げるためアントニヌス勅法を出して帝国内の全自由人にローマ市民権を与えた。加えて、上記の異民族侵入や内乱によって治安が悪化し、政治・経済の中心であったイタリアが衰退し、その経済的地位が低下し、内陸交通路も危険になる中で、大農場は自給自足的性格を強め、貨幣経済が衰退する。そんな中で、インドのサータヴァーハナ朝との季節風貿易などで、金が(ヘレニズム世界・クシャーナ朝も含む)東方へ流出する。このような状況の中で、広大なローマ帝国の統一を維持し続けることも困難となり、地域ごとの勢力が登場し、乱世をまとめるため軍事を優先させる軍人皇帝時代<sup>16</sup>という群雄割拠の時代になった。この悲惨な状態の中で、キリスト教・ミトラ教という新たな宗教が現われる。特にキリスト教は中世ヨーロッパの宗教的・思想的基盤となっていったことも指摘したい。

ここまでの内容を先述のフローチャートと比較すると、(当然、相違点も多くあることは大前提であるが)共通する点が多いことを生徒にも理解させることができるであろう。

加えて、高等学校世界史Bの一部の教科書・資料集では、軍人皇帝時代のようなローマ帝国の大混乱の時期を「3世紀の危機」<sup>17</sup>と呼んでいることを確認する。ちなみに、教科書では山川出版社『詳説世界史B』や、東京書籍『世界史B』で用語として取り上げられており<sup>18</sup>、図説では帝国書院『最新世界史図説タペストリー』十一訂版で2カ所<sup>19</sup>、また浜島書店『新詳世界史図説』や『アカデミア世界史』、第一学習社『グローバルワイド 最新世界史図表』新版改訂でも取り上げられている<sup>20</sup>。特に『最新世界史図説タペストリー』十一訂版「自然災害・気候変動から見る世界史」の年表では、246年のあたりで気候変動の移行期から寒冷期に移行するとしている。

したがって、これまで述べてきたことを踏まえ、地中海世界のみならず、東アジア世界でも「3世紀の危機」と呼ぶことができる状況であったことを指摘したい。しかも、その混乱期は東アジア世界では280年の西晋による統一で、地中海世界では284年

のディオクレティアヌス帝の即位以降、一旦は終わりを告げることで共通していることも触れておく。

(5) 同時代（2世紀半ばから3世紀）のペルシア・中央アジア・インドの状況

目を転じて、世界史Bの教科書の記述を参考に、ペルシア・中央アジア・インド方面の動向を述べていく。ローマ帝国との激闘が続いていた遊牧ペルシア人の国・パルティア（アルサケス朝ペルシア）が、2世紀半ばに北方遊牧騎馬民族のアラン人の侵入を受けたことや、内紛などから衰退し224年に農耕ペルシア人のササン朝ペルシアに滅ぼされること。そしてササン朝ペルシアの第2代のシャープール1世がローマ皇帝ワレリアヌスをエデッサの戦い（260年）で破り、捕虜とするなどへ発展していく。一方、中央アジア・西北インドで勢力を誇ったクシャーナ朝はササン朝ペルシアの攻撃により衰退し、240年に滅亡することも指摘する。

以上の記述を踏まえると、ペルシア・中央アジア・インド方面でいずれも3世紀に支配者が代わるという（少なくとも）政治的大変動が起きており、危機の状態にあったということは確かである。

(6) まとめ及び学習指導上の留意点

授業のまとめとして「3世紀の（日本列島も含む）ユーラシア大陸諸地域世界では、気候の寒冷化の影響もあって「3世紀の危機」と呼ぶことのできる類似した歴史の流れが起こっていた」ことを改めて指摘し、生徒への定着を図りたい。

さらに今後の中国史の学習への導入として、ローマ帝国が一旦「3世紀の危機」を克服したように見えたところから、ゲルマン人の大移動などで西ローマ帝国滅亡という大混乱期を迎えたように、4世紀になるとさらに悪化し、華北では五胡十六国時代、江南では東晋という大分裂時代を迎え、その後、南北朝時代に至るという流れを述べていく。

制度面では、東アジア世界における「3世紀の危機」への対策として、曹操により導入された屯田制が、その後の西晋の占田法・課田法や北魏以降の均田制、ひいては日本の班田収授法へとつながっていく<sup>21</sup>ことも触れておく。

思想・宗教面では、儒教・仏教・道教の魏晋南北朝・隋唐時代の発展の原点がこの時代にあることも指摘しておきたい。

学習指導上の留意点として、中国・三国時代を軸とし、すでに学習したという前提で、倭・ローマ帝国・パルティア・ササン朝ペルシア・クシャーナ朝などを取り上げており、盛りだくさんの内容を含んでいるので、文末に掲げる資料を活用し、ポイントを絞る努力をする必要がある。また、今回示したフローチャートのような歴史の流れは、この後の事項の学習の中で、たびたび復習することで定着を目指し、必ずしもこの一回だけで理解させることを意図していない。ただらと網羅的に事項を解説するだけの授業にならないよう注意し、生徒の理解度に合わせて学習事項を詳しくする場合もあれば、精選する必要もあるであろう。

### Ⅲ おわりに

筆者は、ここまで述べてきた内容の講義・授業を一般の人々向け講座<sup>22</sup>や、大学の歴史学入門・外国史Ⅱ（東洋史）、高校世界史Bで実際に展開してきた。これは3世紀の社会の動きをより総合的に把握するため、時間軸・空間軸を広げ、多角的視野から世界史を学び、中国・三国時代をとらえなおそうと試みた成果<sup>23</sup>である。本稿は『高等学校学習指導要領』及び『高等学校学習指導要領解説』地理歴史編に記載されている方向性を踏まえ生徒・受講者に伝え、そこからさらに教員・生徒が、ともに歴史について深く考えるきっかけにするためである。この教材研究をさらに深め、事項羅列型の学習に陥らないよう、真に“世界史”的で動的な歴史認識を持つことができる授業を考えていきたい。

### 注

- 1 文部科学省『高等学校学習指導要領解説』地理歴史編（教育出版 2010年）p.32。また、文部科学省『高等学校学習指導要領』（東山書房 2009年）も参照。
- 2 文部科学省『高等学校学習指導要領解説』地理歴史編（教育出版 2010年）pp.34-35。
- 3 ここ20年ほどで刊行された『三国志』を扱った小説を執筆された代表的な作家としては、童門冬二（『新釈 三国志』日本経済新聞社 初版は1995～96年）、北方謙三（『三国志』角川春樹事務所 初版は1996～98年）、宮城谷昌光（『三国志』株式会社文藝春秋 2004～14年）の諸氏を挙げることができる。
- 4 ここ20年ほどで刊行された、通史的に『三国志』を扱った代表的なマンガとしては、李学仁〔原案〕王欣太〔著〕『蒼天航路』（講談社 連載は『モーニング』で1994～2005年）がある。
- 5 ここ最近の代表的な『三国志』を扱ったゲームとしては、コーエーテクモゲームスの「三国無双」シリーズや株式会社セガの「三国志大戦」などが挙げられる。注3～5に関しては、拙著『三国志—正史と小説の狭間』〔以下、「拙著1」と略す〕（白帝社 2006年初版、2009年第2版）第一章・「正史『三国志』と小説『三国志演義』」や拙著『三国志赤壁伝説』（白帝社 2009年）などを参照。
- 6 例えば、安田喜憲『気候と文明の盛衰』（朝倉書店 1990年）p.275では、140年以降の自然災害による窮乏は北方からはじまり、次第にその影響が南下したとされている。拙著1・第2章・「後漢末期の混乱と曹操の登場」参照。
- 7 満田剛〔監修〕『「大三国志展」カタログ』（東京富士美術館 2008年）p.146、拙著『「三国志」万華鏡 英雄たちの実像』（未来書房 2008年）第一章「中国・三国時代とは」参照。

- 8 『後漢書』仲長統伝、『三国志』卷十六司馬朗伝参照。
- 9 『三国志』卷一武帝紀裴松之注所引『魏書』には  
袁紹之在河北，軍人仰食桑椹。袁術在江、淮，取給蒲羸。民人相食，州里蕭條。  
とある。
- 10 董卓による銭の改鑄（改悪）によって貨幣への信用がなくなり、貨幣があまり使われなくなる時代となった。拙著1・pp.92-98など参照。
- 11 屯田制について、拙著1・p.119では、  
通常の戸籍に登録されていない人々（つまり、流亡した人々で曹操が掌握したも  
の）や敵から降ってきた人々を半強制的に募って、持ち主のいない土地や戦いで降  
した敵の土地に定着させ耕作させて一定比率で収穫物を徴収したのが曹操の屯田制  
（民屯）であるとされる。また、後に曹操は呉・蜀漢との国境付近（渭水や淮水地  
域）で戦争のないときには兵士を農業に従事させていた（軍屯）。曹操の屯田制の  
特徴は辺境ではなく内地で実施したこと、そして民屯を設置したことである。  
としており、戦乱の影響などで持ち主がいない土地に流民・兵士などを定着させて税を  
納入させ、曹操や魏の皇帝たちの収入を確保する制度であり、特に民屯は「公的に設置  
した曹氏の莊園」（拙著1・p.121）というべきものであった。
- 12 生徒の関心が高い場合には、袁紹・曹操・劉表・劉璋・孫権・劉備などの名前を挙げさ  
せてもよいと考える。
- 13 荊州学については、加賀栄治『中国古典解釈史 魏晋篇』（勁草書房 1964年）、野沢達  
昌「後漢末荊州学派の研究」（『立正大学文学部論叢』41 1972年）、魯錦寰「漢末荊州  
学派与三国政治」（中州学刊1982年4期 1982年）、唐長孺「漢末學術中心的南移与荊州  
学派」（谷川道雄〔篇〕『地域社会在六朝政治文化上所起的作用』玄文社 1989年）、劉  
玉堂・陳紹輝「劉表与漢末荊州學術文化」（『江漢論壇』2001年4期）など多数の研究が  
ある。
- 14 拙著1・pp.107-109参照。
- 15 拙著1・pp.58-59およびp.82・注六参照。
- 16 山川出版社『新世界史』改訂版（2012年）p.47・脚注①には  
2世紀なかばからローマ軍の兵士は駐屯地で徴募され、現地に駐屯して守備にあ  
たったので、各地の軍隊はその地の民族を代表する性格が強まった。  
とあり、この時代の皇帝が各地域を代表する勢力であったと見られる。
- 17 ローマ帝国史における「3世紀の危機」論については、『西洋史研究』新輯39号（西洋  
史研究会 2010年）にある「〔西洋史研究会〕2009年度大会共通論題報告3世紀の「危  
機」再考」の一連の報告・討論にあるように、これまでの学説史を踏まえた上で再検討  
しようという動きも存在している。
- 18 山川出版社『詳説世界史』では、2012年刊行の改訂版と2013年刊行のもの双方の小項目  
に「3世紀の危機」が存在する（2012年版pp.51-52, 2013年版p.45）。帝国書院『新詳



世界史B』では「3世紀の危機」という用語は登場しないが、「17世紀の危機」に関する記載が数多くある。

- 19 帝国書院『最新世界史図説 タベストーリー』十一訂版（2013年）p.73（「ローマ帝国の衰退～オリエントの専制君主政の開始」）・p.300（「風土 自然災害・気候変動から見る世界史」）の年表に記載がある。
- 20 浜島書店『新詳世界史図説』（2007年改訂版）p.34，同『アカデミア世界史』（2010年改訂版）p.68，第一学習社『グローバルワイド 最新世界史図表』新版改訂（2014年発行予定改訂20版）p.34のそれぞれの年表中に登場する。
- 21 満田剛〔監修〕『「大三国志展」カタログ』（東京富士美術館 2008年）p.148・「為政者としての曹操」では、

例えば、流民や兵士に土地を貸し与えて耕させる屯田制を導入して兵糧を確保しているが、これはのちの均田制（日本では班田収授法として導入される）につながると見られている。

としている。
- 22 一例として、「三国志歴史講座・「グローバル・『三国志』一時代の実像と変革者たち」第1回・「世界史の中の『三国志』—「3世紀の危機」に挑む変革者たち」（豊島区民センター 2012年9月18日）が挙げられる。
- 23 拙稿「グローバル・『三国志』」（研究覚え書き）（『東洋学術研究』第49巻第2号 2010年 p.276）参照。

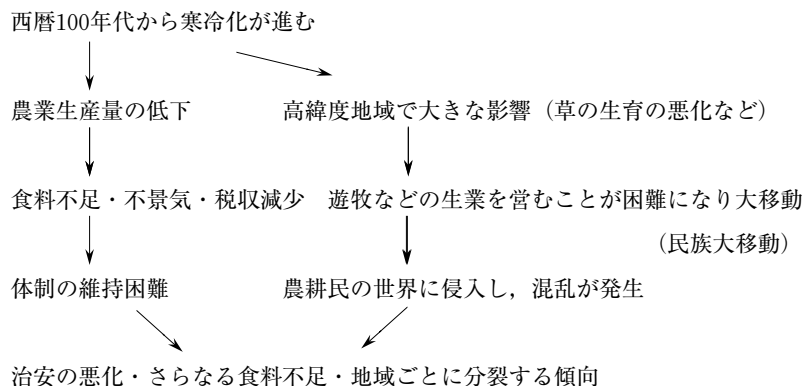
#### 【付録・配布資料】

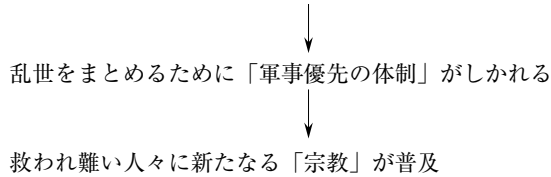
##### 世界史の中の『三国志』—「3世紀の危機」に直面した世界

「『三国志』の時代」とは

- 西暦184年（黄巾の乱）～280年（呉の滅亡）の約100年間，現在「中国」と呼ばれている中の，主に漢族が住んでいる地域が魏・蜀漢・呉の三つの国に分かれて争っていた時代。

後漢末期から中国・三国時代，あるいは「華麗なる暗黒時代」





☆ユーラシア大陸の東部……後漢～三国・西晋

・西暦100年頃～

幼帝が続き、豪族勢力（≡官僚層）・宦官・外戚の党派争い



儒教に基づく価値観 ←⇒ 私利私欲に走る者が多い

（清流派）

※「敵の敵は味方」ということで三つ巴の闘争に発展していく

・西暦107年にはじまる羌族の反乱など、異民族との戦いが激化

・寒冷化の影響もあり、財政・経済不振が表面化

※金が西方（ヘレニズム世界・クシャーナ朝）へ流出？

※袁紹の軍や曹操の軍で食べるものがなくなって乾燥した桑の実を、袁術の軍ではどぶ貝を食べたとか、袁術の支配していた地域で食糧が無くなって農民同士で「人肉相食む」という状態になったとか、曹操が呂布に兗州を奪われそうになった頃（と考えられる）に、そのとき都市の防衛にあたった程昱が兵士の食糧に人肉を混ぜて食べさせたという話がある。

※『三国志』巻二文帝紀によると、225年に魏の文帝・曹丕が水軍を率いて呉を攻めようとしたが、淮水（淮河）から長江に入る水道が凍ってしまって長江に船を乗り入れることができなかつたとある。ちなみに、現代では秦嶺山脈と淮河を結ぶラインが稲作と畑作の境界線である。この境界線から南は稲作、北は畑作である。現代のこのあたりの川・運河が凍ることはなかなか想像しにくい。

・黄巾の乱（184年）以降続発する反乱や異民族の侵入



治安の悪化の中で、豪族の大農園は自給自足性格を強め、貨幣経済が衰退

※地方の軍事力が強化される中での霊帝の「改革」



董卓による混乱以後、割拠する政権は軍事優先の体制をしく

※特に曹操は国家を常時戒嚴令下において統治したと見ることもできる

・中心地であった中原が荒廢し、経済力が低下

・新たなる「宗教の時代」……儒教に加えて道教、そして仏教が普及

※曹操の「青州兵」（黄巾の乱を起こした太平道の残党）、五斗米道の吸収

☆日本列島……邪馬台国

- ・『後漢書』東夷伝の倭の条には、後漢の桓帝と靈帝の時期（117～189年）に「倭国大乱」とあり、ちょうど後漢が寒冷期に突入する頃に日本列島も寒冷化して倭国も混乱したことを示している。

↓

- ・『魏志』倭人伝  
3世紀には、女王・卑弥呼の統治する邪馬台国連語が存在。

☆ユーラシア大陸の西部……ローマ帝国

- ・五賢帝の時代（西暦96～180年）の終わり頃から、異民族との戦いが激化し、パルティアやササン朝ペルシアとも戦う

- ・寒冷化の影響もあり、財政・経済不振が表面化  
※金が東方（ヘレニズム世界・クシャーナ朝）へ流出

- ・カラカラ帝のアントニヌス勅法（212年）  
ローマ市民権を帝国の全自由人にあたえる

↓ この勅法の目的は……

納税者（＝ローマ市民）を増やして、税金を上げるため  
※この頃以降、ローマ市民権は皇帝の専制化により名目化。

- ・軍人皇帝時代（235～284年）  
ローマ帝国各地に駐屯する軍隊が、その司令官を皇帝に推戴し争った時代で、26人の皇帝が乱立し、自然死は1人という事実上の戦国時代。  
※2世紀中頃から、ローマ軍の兵士は駐屯地で募兵されて現地の守備にあたっており、各地の軍隊は駐屯地の民族を代表する性格を持っていた。

- ・軍事力の増強・維持のための都市への重税

↓

経済的疲弊・衰退

- ・農業・土地経営の変化…一部都市上層市民、地方で大所領経営

↓ バクス＝ローマナによる奴隷不足と奴隷生産の非効率性

労働力…貧困化した都市下層市民＝土地に縛り付けられた小作人（コロヌス）

↓

※コンスタンティヌス帝

小作制（コロナートゥス）の普及

※治安の悪化の中で、大農場は自給自足的性格を強め、貨幣経済が衰退

- ・中心地であったイタリアの経済的地位が低下。

- ・キリスト教・ミトラ教の普及

↓

研究ノート：中国・三国時代史“3世紀の危機”の視点から

コンスタンティヌス帝のキリスト教公認（ミラノ勅令 313年）

※キリスト教を軸に帝国の統一維持をはかる

「神寵帝理念」（皇帝位は神の恩寵によって与えられたものとする説）

☆ユーラシア大陸の中部……パルティア／ササン朝ペルシア・クシャーナ朝

・ローマ帝国との激闘の中でパルティアが衰退し、224年に滅亡

↓           ササン朝ペルシア建国

ローマ皇帝ヴァレリアヌスをエデッサの戦いで破り、捕虜とする（260年）

・クシャーナ朝（1世紀中頃～240年頃）

最盛期はカニシカ王の時代（位130年頃～155年頃）

↓

ササン朝ペルシアの攻撃で衰退し、滅亡（240年頃）